

## WLO 第 1 回コンGRESおよび WLO の成立と推移

○山崎律子、上野 幸、廣田治久、高橋和敏 (余暇問題研究所)

キーワード: IRA, WLRA、WLO、World Leisure Congress、NRPA、レジャー研究、レクリエーション

### I 本報告の動機・目的

現在、全世界的規模で国際関係が重視される中で、日本も当然あらゆる分野において国際化が急激に進展している。したがって本学会も、その趨勢の先進的役割を担っているものと考えられる。

- \*その動機・・・幸いにして、ここ数年来、本学会員が国際的会議（主に WLO CONGRESS）に、個人的に出席・報告を行う増加の兆しが見受けられる。・本報告者中の山崎、高橋らも WLO の第 1 回コンGRES 出席者として、また WLO 終身会員 (LIFE MEMBER) として、それらの方々への応援をしたいと願うと共に、本学会員として関係事実の一つを記録に留め置くことが責務と考えたことが本報告における元もとの動機である。加えて国際会議に未参加の本学会員の積極的な国際会議出席も願っている。
- \*その目的・・・WLO 第 1 回コンGRES の概要と本学会に関係のある出席者の紹介と、現在の WLO の推移を紹介報告することが本報告の目的である。なぜなら、WLO 自体の性格と推移を着実に理解することが必要と考えるからである。

### II 国際会議出席による先行報告

本学会において、創設当初からの大会において国際会議に出席・発表・報告に限って見られたものは、僅か 6 件のみであった。（詳細略）しかし、以前から本学会関係者らが出席していたことも事実である。しかしながら、WLO の発足の目的や経緯は、未だ詳しくは報告されていない。最近になり、師岡、田中（伸）らが WLO コンGRES についての報告などが見られ、新たな国際的関心への原動力となる兆しが見えるようになった。

### III 第 1 回コンGRES について

- \*主催: WLRA 共催は、カナダ・アルバータ大学 (University of Alberta)
- \*期日: 1988 年 5 月 16 日～5 月 22 日
- \*会場・場所: カナダ、シャトウー・レイク・ルイーズ (Chateau Lake Louise, CANADA)
- \*テーマ: 自由時間、文化と社会 (FREE TIME, CULTURE and SOCIETY)
- \*プログラム概要: コンGRES 会場と宿泊が同一であったためにプログラムもそれに対応して進められた。第 1 日目の夕方“歓迎リセプションで始まった。全体の開会基調講演は、”レジャーと環境“と題してモーリス・ストロング氏 (Maurice F. Strong - アメリカの水資源開発会社社長) が行った。続いて全体の進行は、教育・情報・マネジメント・研究の 4 コミッション (委員会) 別が基本となり、それぞれ同時進行形式で討議と発題・発表が行われた。なお、5 月 19 日は、コロンビア氷河へのツアーも行われた。

\*各コミッション別の基調講演と発表数:上述したように、各コミッション別に基調講演、討議、発表が行われた。

1) 情報コミッション

基調講演・・・ケネス・ドーウリン (Kenneth Dowlin)

レジャーと情報社会:夢と現実

発表数・・・3題 (討議に主眼を置いた)

2) 教育コミッション

基調講演・・・マックス・デモアス (Max D' Amours)

発表数・・・44題

3) マネジメント・コミッション

基調講演・・・デビット・クラーク (David Clark)

発表数・・・5題 (討議に主眼を置いた)

4) 研究コミッション

基調講演・・・マックス・キャプラン (Max Kaolan)

発表数・・・52題

\*日本からの発表・討議者:

・教育コミッション・・・発表 守能 (青少年団体におけるレジャー教育)

・情報コミッション・討議者 原田 (レジャー・レクリエーションにおけるプリント資料)

討議者 山口 (情報の必要性)

・研究コミッション・・・発表 西野、共同発表者 高橋 (日本におけるレジャー・レクリエーション研究)

\*全体出席者:約 100 名 (正確な実数は不明。なぜならば、中途出席者や中途退席者があり、当時の事務局以外は実数把握が困難のため)

\*本学会員および元本学会員の出席者:17 名 (そのうち大部分は纏まって、ツアーでの出席)

\*開催時の会長と事務局長:

・会長・・・Robert O. Wilder(全米香料協会会長、国連大学副学長)

・事務局長・Cornelis(Cor) Westland(元オッタワ大学・YMCA・レクリエーション・カナダ)

#### IV WLO の設立とその後の経緯

その設立に関しては、NRA が大きく関係している。すなわち、第 2 次世界大戦後の国際連合設立と深く関わっている。1956 年フィラデルフィアで開催された NRA(全米レクリエーション協会、現 NRPA-全米レクリエーション・公園協会)コングレス (年次大会)において 33 カ国の代表が出席し、日本からも江橋 (元本学会会長) が出席した。その結果、この分野でも、とくに発展途上国への援助を含め、全世界的な組織の必要性が認められた。次いで NRA の資金援助のもとに、新世界組織の初代会長としてイアン・ジョンストン (Ian L. Johnston, UK)、当時の NRA 副事務局長トーマス・リバーズ (Thomas Rivers) が、事務局長となった。

\*設立年と正式名称: 1956年、ニューヨーク州認可、INTERNATIONAL RECREATION ASSOCIATION

(IRA, 国際レクリエーション協会)、資金はNRAからの援助

\*設立当初の目的: (1)

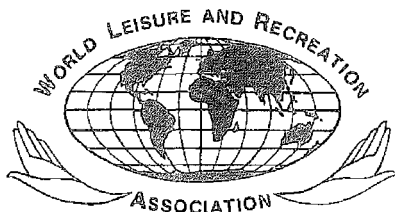
- (1) 世界にわたるレクリエーションに関わる組織情報交換におけるセンター
- (2) レクリエーションに関わる組織のない国への援助
- (3) レジャーを通して生活の心が豊になるようなレクリエーション運動の指導者への援助
- (4) すべての年齢層にわたるレクリエーション・プログラムと施設の増強
- (5) レクリエーションに関する指導者を確保

\*現在の目的: (2)

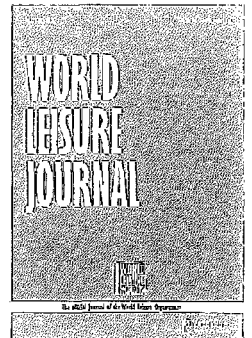
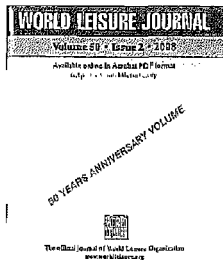
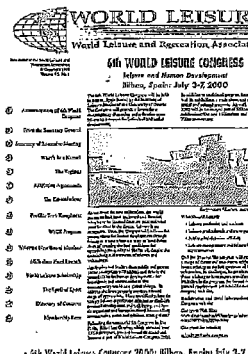
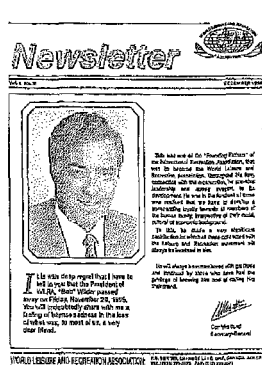
- ・ 国際連合の精神に則る
- ・ 学問研究を高める
- ・ レジャーの推進
- ・ レジャー教育の拡大
- ・ 協力関係の強化
- ・ 会員の増加

\*名称とロゴの推移: 名称変更は次のようになされた。(WLRAから)

・ IRA (1956-1972) → WLRA (1973-2006) → WLO (2007-現在)



\*出版物の推移:



\* レジャー憲章発表：1970年IRA時代に制定・発表された。(1967年スイス・ジュネーブでの国際シンポジウムで発案)

\* WICEの設立：World Leisure Center of Excellence (世界レジャー高等教育センター)が、1990年から1990年までオランダ・リーワーデンに開講→ワーニンゲン大学(オランダ)が引き継ぐ2009まで→2010からVIUとASU

\* 現在の役員：会長デレック・ケーシー (Derek Casey-UK)、事務局長クリストファー・エジントン (Christopher Edginton-USA)、常任理事4人(ハンガリー、南アフリカ、スペイン、ブラジル)、理事8人(中国2人、イスラエル、台湾、ルーマニア、アメリカ、オーストリア、ナイジェリア)

\* 現在の世界的イベント：WLOワールドレジャーコンGRESS(隔年、2014現在で13回目)、ワールドレジャーゲームズ(5年毎、2010年第1回が韓国春川で開催)、ワールドレジャーEXPO(5年毎、第1・2回が中国杭州で開催、第3回目も杭州で開催予定あり)

\* 財政状況：2013年度年次報告によると、最近の概略は下記ようになる。

2012年度総資産・・・\$205,394 → 2013年度総資産・・・\$417,887

## V 考察

- 1) 第1回WLOコンGRESSは、シャトー・レイクルイーズで会議はもちろん寝食を共にした。それには、主に当時の事務局長コー・ウエストランド(Coe Westland,CANADA)の思い、尽力によるものと考えられる。
- 2) 当時の本学会関係者の出席が、17人と多かった。
- 3) 現在のWLOは、元々は現在のNRPAの国際副部長の尽力によると共に資金援助によって設立に至ったことも事実である。(彼は来日し、日本での世界大会を実現させた) また、IRA設立当初から、佐堂(当時日レク協会長)江橋(当時本学会副会長)らが、役員で名を連ねていた。(また高橋は1995年理事に就任、3年間で健康上辞退)
- 4) その設立当初は、主に世界的にレジャーの必要性やレクリエーション運動普及にあり、実践的指導者の確保に重点が置かれていたが、時代の変化と共に科学的研究の要請が高まった。したがって、実践と研究の分離傾向も同時に進んだ。その結果、会員増加が困難になると同時に資金難があった。しかし、2013年から事務局がアメリカに移り、UNI信用金庫と事務局長が所属する北アイオワ大学からの資金的援助を受けたが、その前途は不明確の感を禁じ得ない。
- 5) しかし、本学会員としても、国際的会議への出席・発表や役員としても積極的に参加することが必要と考えられる。

## VI むすび

本報告の趣旨“WLO第1回世界会議の概要とWLOの設立からの推移と現在”については、大まかながら説明できたと思われる。これを機に、より多くの本学会員が国際的にも関心を示していただけることを期待したい。なお参考文献は、WLO第1回会議資料、各年次報告、ジャーナル類、データとグラフでみる社会体育(余暇の時代)高橋・今村監修、東海大学出版会1989などである。(詳細略)